經濟論叢

第九十卷　第四號

ストレーチーの帝国主義論（序説）……静　田　均　1

アルファデルフィヤ・
　アッソシエーション……穂　積　文　雄　18

プレハーノフのロシア資本主義論(二)…田　中　真　晴　40

アメリカにおける公益
　事業の料金形成の一過程……野　村　秀　和　66

昭和三十七年十月

京都大學經濟學會

第九〇巻　二五八　第四号　四〇

プレハーノフのロシア資本主義論（二）

田中真晴

二（承前）

プレハーノフは、「人民の意志」派が旧きナロードニキ主義の無政府主義的、経済主義的、農民主義的傾向をうちやぶって、ロシアの革命運動に新しい局面を切りひらいたことを認めた。「ナロードニキ主義（旧ナロードニキ主義、すなわち「土地と自由」から「黒い割替」にいたる思想……筆者）は、一切の国家思想に対して鋭い拒否的態度をとっていた。これに反して、人民の意志派は国家機構を使って、みずからの社会改革プランを実現しようと目論んだ[1]」「ナロードニキ主義は政治にかかわることを一切拒否していた。これに反して人民の意志派は民主主義的な政治的変革のうちに、もっとも信頼できる社会改革の手段をみた。[2]」「ナロードニキ主義はその綱領を農民のいわゆる理想と要求に基づかせていた。これに反して人民の意志派は主として都市の工業人口に呼びかけ、したがってその綱領において、都市住民・工業人口の利益に、はるかにひろい場所を与えねばならなかった[3]」プレハーノフによれば、「人民の意志派は事実上、ナロードニキ主義の完全な、あらゆる側面からの否定[4]」であり、マルクス主義理論の指し示す正しき路線への事実上の近接をしめしているのだが、それは人民の意志派が革命的実践のなかにおいて、い

わば体験主義的にうち出してきたものであって、理論そのものにおける根本的変化はとげられていない。人民の意志派は旧ナロードニキ主義理論の諸原理に対して根本的な批判を加えることなく、むしろ旧理論を継承しつつ、その理論と事実上撞着するような実践を展開してきたのである。この意味において、人民の意志派は、理論においては誤っているが実践においては評価さるべきものをもっている、と一応はいえる。だが、やはり理論は実践をこのばあいにおいても基本的に制約しているのであって、人民の意志派が旧ナロードニキ主義の母斑をつけていることは、かれらの実践をいくつかの点で不十分なもの、一面的なものたらしめていると、プレハーノフは考える。[5] そこからしてかれは、当面の問題たるロシア革命論に関してつぎのような批判的見解を提出した。

(1) 人民の意志派が、当面の課題をツァーリズムの打倒・民主主義的政治制度の獲得においている点に関しては、プレハーノフに異議はない。かれは、まさしくこの課題を提起した点にこそ人民の意志派の歴史的功績があると考える。しかし、人民の意志派が、ツァーリズムの打倒ののちに、臨時政府による政権掌握→憲法制定議会の召集とそれへの全権力移譲→社会主義への急速な移行を構想するのに対して、プレハーノフは、社会主義への移行のための条件は現在のロシアには存在しないと判断する。「社会主義的組織というものも、その他の組織と同じく、それにふさわしい土台を必要とする。しかしこの土台が現在のロシアには存在していない[6]」「国民生活の旧来の基礎は、あまりにも狭隘、雑多、一面的であって、そのうえもはや不安定になりすぎている。そして新しい基礎はようやく生成しつつあるにすぎない。社会主義的組織のために必要な、生産の客体的な社会的諸条件はまだ成熟していない。それゆえにまた、生産者自身のうちに、社会主義的組織への努力もないし、能力もない。わが農民層はこのような課題を理解することも解決することも、まだできないのである。[7]」

したがって、人民の意志派の構想が連続革命的であるのに対して、プレハーノフの構想は、ブルジョワ革命と社会主義革命との間に、かなりながい資本主義発展の時期の介在を予定する、非連続的二段階革命論である。プレハーノフは、ロシアの発展を世界史の発展から孤立して考えようとするのではない。たしかに、西欧先進諸国における社会主義革命が早期におこるばあいには、ロシアの資本主義的発展それ自体のうちに社会主義のための諸条件が熟しないうちに、ロシアをも社会主義へと移行させうるであろう。プレハーノフは、世界史的な展望としては、西欧先進諸国の社会主義革命こそがロシアにとっても決定的であると考えている。[8] しかし、ロシアそのものの発展・革命過程の考察においては、西欧先進諸国の社会主義革命とそれのロシアへの作用をあてにするのではなく、まずもってロシア社会それ自体の発展が見定められねばならないはずである。そして、ロシア社会その自体のうちから獲得される展望は、非連続的二段階革命でしかありえない、とプレハーノフは考える。人民の意志派は、資本主義がいまだロシアには定着していないという現状認識をもち、まさしくそこに社会主義への捷径を見た。プレハーノフは、ロシアがすでに資本主義の道に決定的に入りこみ、しかも資本主義がなお低度にしか発展していないという現状認識に基づいて、非連続的二段階革命を予想したのである。

(2)　したがって、人民の意志派とプレハーノフとは、当面の課題をツァーリズムの打倒と考える点においていちおうは一致しているにしても、そこにはやはり微妙なちがいが存在している。そのちがいは、闘争方法としてのテロリズムについての賛否にあるのではない。[9] そうではなくて、相違の第一点はツァーリズムの打倒を、社会主義への突破口をなす人民革命と考える（人民の意志派）か、ブルジョワ民主主義革命と考える（プレハーノフ）かにある。プレハーノフは「絶対主義の顚覆と社会主義革命というような、根本的に異る二つのことがらをひとつに結び

つけ、社会発展のこの二つの契機がわが国の歴史においては同時におこるであろうと信じて革命的闘争をおこなうこと、これは二兎を追って一兎をもえないことを意味する」[10]といい、二つの革命の質的相違と時間的隔たりとを強調する。当面の革命は、それ自体としては社会主義の一分子をもふくまぬことが明確に自覚されていなければならない。プレハーノフは、ロシアのブルジョワ革命の具体的な予想を書きしるしてはいないけれども、人民の意志派にみられるような、陰謀主義的・一揆主義的な闘争方法には反対であったし、ツァーリズムの打倒→臨時政府の樹立・社会主義党の過渡的独裁というシェーマを拒否した。絶対主義の打倒・ブルジョワ革命を闘いとるためには、社会主義者は自由主義者と共同戦線を張ることが必要であって、いたずらに社会主義的スローガンをかかげ、「赤い幻影」によって自由主義者たちをおびやかすようなことがあってはならないのである。[11]そして、ツァーリズムが打倒され、政治的自由が獲得されたばあい、どのような民主主義的な政治形態があらわれても、そこで支配するのはブルジョワジーであるほかない。このことはロシアの社会経済構造が今後かなりの期間——西欧先進諸国の社会主義革命の成功とそのロシアへの作用ということを捨象して考えるかぎり——資本主義でしかありえないということ(前述(1))に基づく必然的結果である。

しかし、ブルジョワジーを主座につかしめるブルジョワ革命は、プロレタリアートにとって一大前進の契機である。政治的自由のもとにおいてはじめて、プロレタリアートに基礎を置く社会主義政党(秘密結社やグループでなくて近代的な政党)を創設することが可能となり、ブルジョワジーに対するプロレタリアートの闘いが自由に展開しうる。プロレタリアートはブルジョワ革命においては、「自己の敵の敵」(=ツァーリズム)を打破することによって、「自己の敵」に対する本格的な闘いの条件をつくりだすのである。

(3) それゆえ、プレハーノフの構想するロシア革命のコースは、

ツァーリズムの打倒・ブルジョワ革命（政治的自由の確立）→資本主義発展（ブルジョワジーの支配）の時期→社会主義革命→社会主義組織への移行

である。その特徴は右に述べたように、二つの革命の質的相違と、社会主義革命までの遠さ（資本主義的発展・ブルジョワジー支配の時期の介在の必然性）を主張するところにあった。しかし実は、遠いのは社会主義革命だけではない。ツァーリズムの打倒（ブルジョワ革命）はまさしく当面の任務であるけれども、かならずしもきわめて近い将来に成就するとはかぎらない、とプレハーノフは見る。さきに述べたように、かれが人民の意志派批判としてみずからのロシア革命論の構想をつくりあげたのは、人民の意志派がその頂点を過ぎて急速に崩壊し、ツァーリズムの反動体制が固められつつあったときである。かれは、当面の課題についてつぎのように書いている。「一方においては自由な政治制度の獲得、他方においては将来のロシアの労働者社会民主党の形成のためのエレメントをつくりだすこと、このことだけが、ロシア社会主義者の、幻想的ならざる、現在の目標でありうると、われわれは考える」[12]と。だが、かれはそのさい、「自由な政治制度の獲得」にいたるまでの途上の諸困難を指摘し[13]、革命陣営の理論的・実践的再編成こそが、現時点の最緊急の課題だと考えているのである。かれのヴィジョンにおいては、準備の季節のその向うに、ブルジョワ的変革の過程がはじまる。そして、準備の季節たる現在において、将来のロシア・マルクス主義政党形成のための用意を整えようというのである。プレハーノフは、資本主義の発展がまだ低度である段階において、「科学的社会主義」の理論によって将来の闘いを準備しうるという点にこそ、後進国ロシアの特殊的利点があると考えた[14]。

プレハーノフの思想は、人民の意志派の熱っぽい革命論に比べて、まことに散文的であり、ウェーバーが好んで使う言葉を借用するならば、醒めた（nüchtern geworden）ものであった。かれは、革命の緊迫感を幻影の産物にすぎぬと批判して、あくまでも冷静な客観的認識への徹底を主張し、主体的自由の意識（革命的ロマンチシズム）に対立して、客観的過程による主体の被制約性を前面に押しだした。[15] プレハーノフの客観主義的発想法は、たしかに人民の意志派の弱点をついた。それと同時に、かれの発想法と右のごときロシア革命の構想は、のちにレーニンとするどく対立するにいたる種子をふくんでいる。[16] ただし、その対立が現実化するのは一九〇〇年以降、ロシア革命がアクチュアルな問題として日程にのぼりはじめる時点においてであって、それ以前のいわば準備の季節においては、プレハーノフのロシア革命論はロシア・マルクス主義のただひとつの、ゆるぎない理論という地位を占めつづけ、レーニン、マルトフ、ポトレソフ、ストルーヴェらはまずそれによって教育されるのである。この点は後論および別稿において再論するであろう。いまはそのための伏線的指摘にとどめて本題にもどろう。前稿において述べたように、プレハーノフのロシア革命論は『社会主義と政治闘争』において定式化され、『われわれの相違』およびその後の労作の基本的理念となった。しかし、かれのロシア革命論の基礎ともいうべきロシアの現状分析（ロシア資本主義発展論）は、『われわれの相違』においてはじめて展開されたのである。

(1) (2) (3) (4) Социализм и политическая борьба, 1883. Избранные философские произведения, т. 1, 1956. стр. 66. 本稿は「プレハーノフのロシア資本主義論(下)」（『経済論叢』八九巻五号）の続稿である。

(5) プレハーノフが「人民の意志派は旧ナロードニキ主義の理論を継承している」というばあい、その中心をなすのは、共同体の理想化・特殊ロシア的発展の思想のことである。そして、政治主義的でありながら、革命後の過程の見通しにおいては無政

府主義的であること、また、都市労働者を重視しながらも、革命主体としてのプロレタリアートという思想には至らぬことが、それと結びついたものとして考えられている。プレハーノフはこの書において、人民の意志党を「過渡期の子」(Там же. стр. 96)すなわち、事実上ナロードニキ主義からマルクス主義への道を歩みつつあるものとして把握しているが、これは人民の意志党に対するプレハーノフの評価の頂点であって、のちにはもっと否定的に評価するようになる(本稿第三節を参照)。ただし『社会主義と政治闘争』においても、プレハーノフは結局は人民の意志党の理論的脆弱性を云いたいのである。「革命的理論なしには、言葉の真の意味においての革命的運動はありえない」(Там же. стр. 95)という句は、実はレーニンよりさき、プレハーノフが人民の意志派批判において、本文のごとき脈絡において吐いた言葉である。

(6)

(7) Там же. стр. 103.

(8) 『われわれの相違』におけるつぎのごとき句を参照。「後進諸国にとって、問題はつぎのようにだけ定式化されうる。西欧資本主義は、みずからがヨリ高次の社会形態に席をあけ渡す以前に、後進諸国を自己の渦のなかへ引きこむことに成功するであろうか、またどの程度に成功するであろうか、と。」(Там же. стр. 220.)「ロシアにおける資本主義の発展はたとえばイギリスにおいてのように徐々ではありえないだけでなく、資本主義の存在そのものが、西欧諸国において運命づけられていたような長続きをロシアではなしえないであろう。わが国の資本主義は完全に開花しおわる以前に散るであろう。国際的な諸関係の強力な影響が、われわれにこのことを保証する」(Там же. стр. 353)したがって、ロシアだけの社会主義革命への到着ということは本来ありえない。社会主義革命は現実には、先進国で起り、ロシアはその影響下に社会主義へ移りうるのである。この点、プレハーノフはあくまで古典的マルクス主義の見解を継承している。以下の本文において、ロシア革命だけをとりあつかうために、プレハーノフが一国の自立的発展論(一国社会主義革命論)をもっていたかのごとくに誤解されぬよう、注意を促しておきたい。

(9) プレハーノフはテロリズムを一つの闘争手段として是認している(「プレハーノフのロシア資本主義論(一)」五頁を参照)。ただし、「第一次綱領草案」(一八八四)に比べて「第二次綱領草案」(一八八七)においては、テロルは条件づき肯定となって、後退している。「……闘争の利益のために必要とあれば、いわゆるテロル行為をも拒否しないであろう」(Г. В. Плеханов: Избранные философские произведения, т. 1. стр. 379.)。

(10) Изб. фил. произ. т. 1. стр. 110.

(11) プレハーノフは「自由な政治的制度の要求」においては「自由主義者たち」と手を結ぶというのであって、ブル革は自由主義者・ブルジョワジーに委しておけというのではない。ブルジョワ革命の原動力（行動主体）は都市労働者を中心とする人民であり、社会主義者はそのさい民主主義的要求の代弁者として働くのである。プレハーノフはこの点、一八四八年におけるドイツ・プロレタリアートに対するマルクスの指示を引いている。См. там же. стр. 111, 225.

(12) Там же. стр. 106–7.

(13) 「……われわれはいつも同じ誤りをくりかえしてきた。われわれはつねに自己の力を過大に評価し、社会環境からわれわれにはねかえってくる抵抗というものを、完全に計算にいれたことは一度もなかった……」(Там же. стр. 96)

(14) 「……あれこれの自然法則または社会発展法則の発見は、まず第一には、それに衝突することを、したがって無益な努力を費すことを避け得しめ、第二には、それから利益を引き出すような仕方でそれらの法則を適用することを可能ならしめる。……社会主義運動がわが国においては、資本主義がまだ胚芽のうちに始まったという、このとくに重要な事情を、われわれは逃してはならない。」(Там же. стр. 289)「立憲時代の到来以前においても、ロシアの社会的勢力の事実上の関係を労働者階級の利益になるように変えるように努めること」が必要であって、労働者階級の組織が弱く政治意識がひくいばあいには、絶対主義の打倒後において、ブルジョワジーのために、社会主義政党が非合法化されるおそれが十分にある(Там же. стр. 108)。プレハーノフはドイツを多くのばあいにおいて範例としているが、ドイツ社会民主党が非合法化されたことを前車のわだちとして、いましめている。

(15) プレハーノフは、人民の意志派には「政治的目測というものが欠けている」「人民の意志派は、正しい道を歩んではいるのだが距離についての観念をまだもっていないために、〈十万露里を走ってどこにも休まない〉ことができると確信している人間を連想させる」(Там же. стр. 97) という。別の機会にかれは、ロシアの社会主義者たちがマルクス主義理論を受けいれたがらないのは、そうするとロシアの社会主義実現の時点が遠いことを認めねばならないからである、と指摘している。См. там же. стр. 352.

(16) 第一次ロシア革命の時期において、プレハーノフは本節に述べたロシア革命論を固守するのに対して、レーニンは労農提携

のブルジョワ革命論を主張する。レーニンからすればプレハーノフの思想は、ロシア・ブルジョワジーの革命性を過大評価し、農民の革命性を無視するところの、ロシアの現状にそぐわない公式論であり、プレハーノフからすればレーニンの思想は、人民の意志派の復活に他ならず、政治主義的・権力主義的偏向と思われた。一九一七年の時点においては、プレハーノフはマルクス主義運動からすでに離脱しているが、早期的な権力掌握に反対するかれの主張は、ブルジョワ革命ののちにブルジョワジー支配のもとでの資本主義発展の時期を措定する非連続的二段階革命論の論理的帰結である。他方、レーニンは第一次革命において連続的二段階革命的であったが、労農の権力掌握下における資本主義的発展の時期を考えていたのに、一九一七年においては、その時期の必然性を云わなくなって、文字通りの連続革命論となる。以下の叙述は、ロシア資本主義分析に関するプレハーノフの先駆的業績の紹介をテーマとするが、後年におけるプレハーノフとレーニンとの対立の根拠を両者のロシア資本主義論において検討することを、もう一つさきの問題として予想している。

三

『われわれの相違』《Наши разногласия》（一八八四年夏脱稿、一八八五年はじめジュネーヴにおいて刊行）は、「ラヴローフへの手紙（はしがきにかえて）」以下、「序論」「第一章　若干の歴史的検討」「第二章　ロシアにおける資本主義」「第三章　資本主義と共同体的土地所有」「第四章　資本主義とわれわれの任務」「第五章　ロシアにおける社会主義者の真の任務」「第六章　結論」という順序で構成されている。

前稿ですこしく言及しておいたように[1]、『社会主義と政治闘争』の出版と労働解放団の結成は人民の意志派の理論家たちの反ばつを招き、プレハーノフはそれに対する徹底的な反批判としてこの書をかいたのであった。ためにこの書のスタイルは前著にくらべていっそう論争的であり、高踏的で辛らつな批判に充ちている[2]。その批判の鋒先はまず、『人民の意志通報』誌の編集者のひとりたるラヴローフ П. Л. Лавров（一八二三―一九〇〇）に向けられ

ている。

ラヴローフは、プレハーノフとは親子ほども年のちがう、ナロードニキ主義の長老格的人物である。かれの発想法は、元来は人民の意志派とはそぐわぬものであったと云っておそらく誤りないであろう。[3] しかし、亡命地にあってナロードニキ主義運動に力をつくしつづけてきたかれは、人民の意志党の崩壊に面したとき、なによりもまず革命陣営の内部分裂をおそれ、大同団結の要を叫ぶに急であった。プレハーノフの人民の意志派理論批判は、かれの目には、効果においてツァーリズムを利するにすぎぬ分派的行為として映った。そこでかれは、マルクス主義と人民の意志派理論との間にプレハーノフのいうごとき矛盾対立はないのだと強弁して、プレハーノフの問題提起をはぐらかし、「無用の」内部闘争をいましめたのである。[4] しかしこのようなラヴローフのやり方は、もとよりプレハーノフを満足させはしなかった。プレハーノフは、ラヴローフの折衷主義の理論的無原則性をきびしく批判し、結束の維持に県命なこの老革命家の手を払いのけて、『社会主義と政治闘争』の正しさを主張すると同時に、人民の意志派はいまやチホミーロフ論文「われわれは革命からなにを期待することができるか」[5] においてみずからの理論的頽廃を示していると主張する。

右のような「ラヴローフへの手紙」のあと、序論から結論にいたる計七章においてプレハーノフは、右のチホミーロフ論文の詳細な検討をおこない、そのことを媒介としてかれ自身の見解を再説し、基礎づけ、拡げている。チホミーロフ Л. А. Тихомиров（一八五二―一九二三）はかつて「土地と自由」結社においてプレハーノフと協働し、結社の分裂後は「人民の意志党」の執行委員会のメンバーとして活躍、ツァー暗殺事件（八一年三月一日）のあといちはやく亡命、『人民の意志通報』誌の共同編集者[6] のひとりになっていた人物で、プレハーノフと同世代の少壮理

論家である。かれはその後『なぜわたくしは革命家であることをやめたか』（一八八八）を書いて君主主義者に転向するにいたる。だからプレハーノフが、チホミーロフ論文を腐敗過程にある人民の意志派理論として把握したことは、結果として見事な予言的洞察となったわけである。[7] ともあれ、人民の意志党の主力が壊滅してロシアの革命運動が空白期に入りつつあった時点においての、ラヴローフ、チホミーロフ、プレハーノフの三通りの志向は、転換期の思想的状況を象徴しているように思われて興味ぶかい。

プレハーノフのチホミーロフに対する詳細な批判を逐一紹介することは本論のテーマからそれるので省略しよう。ただ、プレハーノフが、チホミーロフ論文を「ロシア・ブランキズム」[8]の直系として位置づけ、「トカチョフの社会的・政治的見解の新訂増補版、ただし同時に多くの面で改悪された版にすぎない」[9]と規定し、かつ、エンゲルスのトカチョフ批判を全面的に利用していることだけは、注記しておかねばならない。[10] じっさい、プレハーノフがもっとも嫌ったのは権力主義的な即時革命論であり、それに対するエンゲルスのかの高踏的批判こそはプレハーノフの趣味に合致するものであったといえよう。[11]

さて、内容からいって『われわれの相違』の中心をなすのは、ロシア資本主義分析にあてられている第二、三章である。序論および第一章はそれへの導入部、第四章以下はそれからの帰結部とみることができる。すなわち、プレハーノフは序論において、ナロードニキ主義の始祖と驍将たちのロシア社会論を検討し、ロシアの資本主義化の回避可能性の信条と、それとうらはらをなす、ロシア社会の具体的分析の不足という思想史的伝統を俎上にのぼせており、そうした伝統のなかにあって、かれ自身のロシア資本主義必然論は当否はともあれまったく新しい見解であると主張している。その意味で序論はロシア資本主義分析への思想史的序説[12]である。ついで第一章は、西欧社会

主義の諸理論とそのなかでのマルクス主義の位置、資本主義の歴史的役割、西欧における資本主義の歴史的諸事実の三点を、チホミーロフのそれらに対する「無理解」を批判しつつあきらかにしようとしており、ロシア資本主義分析にとって必要な基礎的・準備的知識の整備が、ここでおこなわれている。序論と第一章が、第二、三章に対する導入部をなすというのはこの意味においである。ただし、厳密にいうと第一章の末節（第六節）は事実上ロシア資本主義論にすでに入っており、第二、第三章のほうへあわせて読むのが適当であると考えられるので、以下の本稿ではそのようにあつかうであろう。さて、中心部たる二つの章のあにつづく第四、五、六の三つの章は、紙幅はかなり大きいけれども、内容的には、ロシア資本主義分析を経たうえで、『社会主義と政治闘争』に述べられた綱領的諸主張をいまいちど展開しているにすぎない。その要点は本稿前節にすでに紹介しており、とくに新規な点はない。

『われわれの相違』の概要とそのなかでのロシア資本主義論の位置を右のように理解してよいとすれば、[13] つぎに一言すべきはロシア資本主義論そのものの構成についてである。

予想せられるように、プレハーノフはロシア資本主義論においても、論争のかたちで自説を展開しているが、ただここでは、チホミーロフ論文のほかにヴォロンツォフ『ロシアにおける資本主義の運命』《Судьбы капитализма в России》（一八八二）が論争の対象となっている。けだし、プレハーノフによれば、チホミーロフは資本主義一般およびロシア資本主義の理解において、ヴォロンツォフに全面的に依拠し、したがってヴォロンツォフの誤謬をすべて再現しており、「反動家」ヴォロンツォフの見解を無批判的に受けいれていることこそは、チホミーロフ論文が人民の意志派の理論的頽廃過程の産物たることのなによりの証左に他ならない。かれはこのように考えて、

ヴォロンツォフ＝チホミーロフ批判のかたちで自説を展開しているのである。いま、ヴォロンツォフの右の労作の内部にたちいることはできないが、わたくしは前稿においてこの書を、八〇年代初頭にあらわれたロシア資本主義没落論の代表的労作と規定し、七〇年代ナロードニキに特徴的な二つの道の可能性の思想――人民の意志派自体はこれを継承していた――とロシア資本主義没落論との微妙な相違を論じておいた。[14] そしてそのさい、元来は合法的ナロードニキによって提起せられたロシア資本主義没落論が、混迷状態に陥った革命的ナロードニキの現状認識をも染めていったと述べたが、それは具体的には右のごとき、ヴォロンツォフの理論のチホミーロフ論文への浸潤のことである。七〇年代の末には、ともに二つの道の可能性の思想をいだいていたチホミーロフとプレハーノフであったが、前者はそこから没落論へ、後者は発展論へとすすんだのであった。[15]

さて、ヴォロンツォフ＝チホミーロフ批判のかたちで展開されているプレハーノフのロシア資本主義論は、論争的形式の叙述というものが一般にしばしばそうであるように、批判と分析とがいりくんでいるため、テキストの順序通りに紹介しようとすると、あまりにも煩雑になり要点が見失われるおそれがある。そこで、わたくしは以下の行論においては、ヴォロンツォフ＝チホミーロフのロシア資本主義没落論の主要命題を展開の基準とし、それぞれの命題に対するプレハーノフの批判を紹介し、そのさいプレハーノフのポジティヴな分析をなるたけ体系的なかたちに整理して紹介することに努める。私見によれば、本書に登場している没落論の主要命題は四つある。それらを市場不足論、賃労働者数一定論、クスターリ＝人民的生産論、共同体不変論と名付けておこう。この四つの命題に対するプレハーノフの批判と積極的分析との関係は、ほぼつぎのごとくである。[16]

(1)　市場不足論の批判……→市場理論および比較史的観点からのロシア資本主義の現段階の位置づけ

(2) 賃労働者数一定論の批判
(3) クスターリ＝人民的生産論の批判 ……→製造工業を中心とする現状分析
(4) 共同体不変論の批判……→共同体論とそれを基礎としての農民経済の分析

次節以降でその内容を検討しよう。

(1) 「プレハーノフのロシア資本主義論(一)」(『経済論叢』八九巻五号)第二節註②(同誌一七―一八頁)。なお、「一九世紀末ロシア資本主義論史の研究序説」(『経済論叢』八九巻一号)第一節註②(同誌二一頁)をも参照。

(2) プレハーノフにもっとも近しかったヴェーラ・ザースリッチが「プレハーノフはいつも、自分の論敵にたいする同情の念を読者の心におこさせるようなやり方で論戦をする」(『レーニン全集』第四巻三六四頁)と評したかれの辛らつさは、『われわれの相違』からはじまったように思われる。その辛らつさは、かえってかれの議論を全体としては平板ならしめている点がある。

(3) ラヴローフは《Исторические письма, 1868–69》(松井茂雄訳『歴史書簡』、『スラヴ研究』一―五号に掲載)の著者、一八七〇年以後亡命、パリにおいて《Вперед》誌を発行(一八七三―七七)、啓蒙活動を中心とする漸進主義的な実践を主張した。これに対してトカチョフは小冊子《Задачи революционной пропаганды в России, 1874.》(『ロシアにおける革命的宣伝の諸任務』)において、少数の革命家エリートによる即時革命論を提唱、ラヴローフは《Русской социально-революционной молодежи, 1874.》(『ロシアの革命的青年に与う』)を書いて反駁、トカチョフは一八七五年末、《Вперед》誌に対抗して《Набат》誌を発行した。人民の意志派がトカチョフの血統をひくものであるとすれば、七〇年代中葉の右の論争におけるラヴローフの思想と立場は、かれと人民の意志派との異質性、逆にかれとプレハーノフとの親近性を予想させる。事実、プレハーノフは決裂以前にはラヴローフに近しかったし(拙稿「プレハーノフのロシア資本主義論(一)」八頁を参照)、また『われわれの相違』において、ロシアの資本主義化は必ずしも革命をおくらせはしないし、ロシアは短期にせよ資本主義的発展をするであろうという、

ナロードニキ主義理論家としては例外的な認識をラヴローフがもっていたことを指摘している。Там же. стр. 180–81, 306–10, См. Кареев, Н. К.; Народническая литература 60-90-х годов XIX века, Н. Э. Л. 1958, стр. 24–34. ただし、ラヴローフの折衷主義的傾向は、およそ一切の折衷主義の嫌いな、理論の純血性をなによりも尊重するプレハーノフの傾向とするどく対立するものがあり、両者の離反はそのあらわれとも云えるであろう。

(4) ラヴローフは『人民の意志通報』第二号（一八八四年四月）の書評欄において、『社会主義と政治闘争』その他の短評をおこなった。プレハーノフがここで問題としているのはそれである。ラヴローフはそのなかで、マルクスを「偉大な教師」と呼ぶ反面、マルクス主義をめざす労働解放団を「人民の意志党との論争をロシア政府およびロシア人民のその他の搾取者に対する闘争よりも時宜にかなったことと考えるようなグループ」ときめつけた。Там же. стр. 126.

(5) Тихомиров, Л. А.:《Что нам делать от революции?》（『人民の意志通報』誌第二号に掲載）以下においてチホミーロフ論文と呼ぶのはこれである。

(6) 『人民の意志通報』誌《Вестник народной воли》は、一八八三—八六（八七？）年にスイスで計五号を発行した、人民の意志党の在外機関誌。その編集者は始めはチホミーロフ、ラヴローフ、プレハーノフであったが、プレハーノフは第一号刊行前に退いた。「プレハーノフのロシア資本主義論(一)」第二節註①を参照。

(7) チホミーロフの『なぜわたくしは革命家たることをやめたか』に対してプレハーノフは『専制主義の新しい弁護人。別名チホミーロフ氏の悲哀』《Новый защитник самодержавия, или горе г. Тихомиров, 1889》（соч. т. III. стр. 45–82. および Изб. фил. произ. т. I. стр. 382–417. に所収）を書いて報いた。そのなかで、および『われわれの相違』の一九〇五年版の註においてプレハーノフは自己の先見の明を誇っている。См. Изб. фил. произ. т. I. стр. 369–70. チホミーロフの思想の変質がいつから始まったかは問題であるが、人民の意志党執行委員のひとりであったヴェーラ・フィグネルは、「自他ともにゆるすわれわれの思想的代弁者、理論家で、すぐれた著述家」であったチホミーロフは「すでに一八八一年からすこしずつ奇妙な言動をみせていた」といい、そのいちはやい亡命を実質的な裏切行為としている。フィグネル「ロシアの夜」（『世界ノンフィクション全集』㉑一二四、二八頁）。

(8) プレハーノフのいう、ロシア・ブランキズムすなわち「ブランキズムのロシア的変種」の特徴とは、ブランキズムに「バク

ーニンから借用したロシア農民の理想化」が結合されていることにある。Там же. стр. 178. プレハーノフは勿論、人民の意志派の理論的本質をもロシア・ブランキズムとして理解しているのである。「綱領の出発点である理論的諸原則は不変のままで、政治的結論だけが以前とはまったく逆になった。バクーニン主義は政治的抑制を放棄して、一八〇度の弧をえがき、革命の希望をロシアの経済的後進性に託す、ブランキズムのロシア的変種として再生した」Там же. стр. 125.

(9) Там же. стр. 175-6. トカチョフについては註③のほかに Cf. Venturi, F.; Roots of Revolution, 1960., Chap. 16. Кагарлиц, И. К.; Указ. соч. стр. 31-34.

(10) 註③に述べたラヴローフ・トカチョフ論争の進行中に、エンゲルスは第一インター内部におけるバクーニン主義の問題に関してラヴローフを非難した文中で、トカチョフを「青くさい、めずらしいほど未熟な中学生」と書いた。トカチョフは Offener Brief an Herrn Fr. Engels; 1874. をもって挑戦、エンゲルスは『フォルクシュタート』誌にトカチョフ批判と自己のロシア論を書いた。エンゲルスのそれらの論稿は Internationales aus dem Volksstaat (1871-75), 1894 (邦訳マル・エン選集十三巻所収) におさめられた。エンゲルスのトカチョフ批判は果してロシアの革命思想に対する周到な理解にもとづくものであったかどうか、そこには疑問があると思う。プレハーノフのエンゲルス引用は数多いがとくに Там же, стр.75-87.

(11) 「プレハーノフのロシア資本主義論(一)」六、一〇、一一頁を参照。

(12) 序論における、ゲルツェン、チェルヌィシェフスキー、バクーニン、トカチョフらのロシア社会論の叙述、とくにゲルツェンとチェルヌィシェフスキーに関する部分は割愛するに惜しいが、ここでは紙幅の増大と構成のひずみをおそれて一切省略する。ただ、プレハーノフの後年の広汎なロシア社会思想史研究への出立点がここにあったということ、そして、プレハーノフのロシア思想史解釈は、内在的理解よりは超越的批判のつよい、合理主義的な傾向をもっているが、それは特殊ロシア的なものの肯定的理解をすべて拒否するかれのロシア社会論と表裏一体をなしていることを記しておく。

(13) ただし、本文のごとき構成理解は、筆者の問題視点に焦点をあわせた再構成というべき面をもつことを断っておく。テキストの通読による印象からいえば、各章がもっと平等な資格で並んでいる。

(14) ヴォロンツォフ『ロシアにおける資本主義の運命』自体については、松岡保氏の近く発表されるはずの論文を参照されたい。さしあたり、レーニンおよびローザ(『資本蓄積論』第二篇一九章)のほか、Simchowitsch, W. G.; Die sozial-ökonomischen

Lehren der russischen Narodniki, Jahrb. f. Nationalökonomie und Statistik, 1897, SS. 641-78. Von Lauc, T. H.; The Fate of Capitalism in Russia: the Narodnik Version, A. S. E. E. R. Vol. XIII. N° 1. Feb. 1954, pp. 11-28. ヴォロンツォフの右の労作に対して、プレハーノフよりもさきにジーベルが書評をしている。Зибер, Н. И.;《Капитализм в России》, Вольное слово, N°.41, 1882 г.（Н. И. Зибер. Избранные экономические произведения, т. 2. 1959, стр. 661-73.）かれは賃労働者数の推定その他について疑問を表明し、ロシアにおける資本主義発展の事実をあげている。かれの視点は自由主義ないしはアカデミズムのそれであると思う。ツァーリズムの命脈は尽きたと述べているが、論調はおだやかでプレハーノフのごとく論争的ではない。

(15)「一九世紀末ロシア資本主義論の研究序説」第二・三節、「プレハーノフのロシア資本主義論(一)」第一節を参照。

(16) ロシア資本主義論の部分のテキストの章節区分はつぎのとおり。

第一章　(6) 西欧における資本主義の発展

第二章　(1) 国内市場　(2) 労働者数　(3) クスターリ　(4) クスターリ営業と農業　(5) クスターリと工場　(6) ロシア資本主義の成功　(7) 販路

第三章　(1) 農業における資本主義　(2) 共同体　(3) わが国の共同体の解体　(4) ナロードニキの理想的共同体　(5) 買戻し操作　(6) 小土地所有　(7) 結論

四

ロシア資本主義没落論の第一命題・市場不足論とは、おくれて登場したロシア資本主義にはもはや市場が残されていないがゆえに、ロシア資本主義の前途は絶望であるという主張である。チホミーロフはヴォロンツォフに拠ってつぎのように述べている。

「わが国の現在の状態は、ヨーロッパの諸国が私的資本を基礎にして国民的生産を組織しはじめたころの状態と

はいちじるしく異っている。それらの諸国の私的企業家たちは、自己のまえに巨大な市場をもっており、そしてみずからにとってとくに恐るべき競争者はいなかった。しかるにわが国には市場がほとんどまったく欠けている。私的企業者たちはなにひとつするにしてもそのたびごとに、欧米の生産のうちかち難い競争に出あっている。[1]」

この主張はレーニンのナロードニキ批判[2]によって一般に知られているのであるが、プレハーノフの先駆的批判はつぎのとおりであった。[3]

まず、西欧における資本主義の生成期には「巨大な市場」が「あらかじめ出来上ったものとして眼の前にあった」かのごとくに云うのは、事実に反している。「市場は生産と並んでのみ発展しえた」というのが真相である。つぎに、西欧資本主義というものをなにか一つのもののように考えて、それとロシアとを対比するのは抽象的である。具体的に存在するのは西欧資本主義諸国であり、それらの諸国は、市場をめぐる戦いにおいて、互が互にとって文字通り「とくに恐るべき競争相手」だったのである。さらに、西欧諸国は同時点においていっせいに資本主義へのスタートをきったのでは決してない。西欧諸国のあいだにおいて先進資本主義と後進資本主義との差があり、前者は後者にとって「うちかちがたい」とみえる敵だったのである。一七世紀におけるオランダ、一八世紀以降のイギリスに対して、その他の西欧諸国は後進資本主義国としての艱苦をなめてきた。だが、だからといって後進諸国の資本主義は没落しはしなかった。後進国は先進国の競争に対して、保護関税制度によって国内市場を自国ブルジョワジーのために確保することができる。プレハーノフは、リスト『経済学の国民的体系』を主たる典拠とし、ルヴァスール、マイヤー、アイゼンハルトその他を援用して、[4]フランス・ドイツ・アメリカの関税政策史をかなり詳細に述べ、保護関税制度の有効性と後進資本主義の飛躍的発展の事実、したがって先進・後進ということの相対性を

指摘している。

右の論述は、チホミーロフ＝ヴォロンツォフの市場不足論の欠陥をたくみについているが、すすんでプレハーノフ自身は市場問題についてどのような経済理論的解答を用意していたのであろうか。けだし、関税による国内市場の保護云々は、資本主義と市場との理論的関係を説明するものではなく、したがってまた資本主義的世界全体についての市場問題を解きあかしはしない。それはただ、市場の分割において、後進資本主義国が先進資本主義国に対して、生産力的実力のさし示すところよりもヨリ有利な状況を創出することができることを云うにすぎないからである。

プレハーノフはこう考える。まず、「自然経済から貨幣経済への移行は、必然的に国内市場の巨大な拡大をともなう」[5]そして、その国内市場は適切な関税政策によって自国ブルジョワジーのために確保されうる。しかし、資本主義の発展がある段階に達すると、「国内市場は供給過剰におちいり、ブルジョワジーは外国市場を確保することに急ぐ」[6]と。したがって後進国にとって保護関税が意味をもつのは「国内市場が溢れるまで」[7]の時期においてである。プレハーノフはさきに引用したように、たしかに一方においては「市場は生産とならんでのみ発展する」といって、市場の発展を生産の発展に帰着させているのではあるが、それとともに、生産の発展が市場の発展を追いこすところに資本主義の本質があると考えているのである。そして、世界資本主義の現状について、「現在の生産力の増大のテンポは、市場の発展のテンポを上廻っており、周期的恐慌がひとつの全面的な漫性的恐慌に転化しようとしている」[8]と判断する。――みられるとおり、プレハーノフの市場理論は、理論的に整備されたものではなく、素朴な過少消費論への偏向のゆえに、市場発展の原理的考察をゆるがせにしている。たしかに、『資本論』第二部

がまだ公刊されていない当時に執筆された本書においては、再生産表式（＝実現理論）に拠って資本主義のもとでの市場発展の態様を理論的に説明するすべはなかった。このことは注意されねばならない。しかし『資本論』第一部だけを基礎にしても、もっと進みえたはずである。[9] プレハーノフは、「自然経済から貨幣経済への移行が市場の拡大を伴う」というばあいにおいても、社会的分業の進展が（私有財産制のもとでは）生産物の商品への転化をひきおこし、いまや商品に転化した生産物相互のための市場をつくりだすのだという、初歩的にして原理的な点を十分に見据えてはいない。さらに、『資本論』第一部二四章五節に展開されている原蓄期の市場発展の理論は、未利用におわっている。プレハーノフはなぜ、社会的分業の進展がすなわち市場の拡大をもたらすという、ケネーやスミスがすでに十分に認識していた原理を確認してそこから出発しなかったのであろうか。おそらくかれは、販路説・一般的過剰生産否定論へのみずからの対抗意識にひきずられて、販路説の基礎をなす命題を回避したのであろう。だがそのためにかれはローマン主義および前マルクス的社会主義にほぼ共通な、単純な過少消費説にとどまり、厳密にいえばナロードニキと同じ水準の面をのこしたのである。ちなみにかれは、『われわれの相違』の一九〇五年版への注において、すなわち『資本論』第二部・第三部の刊行後においても、ひたすら自己の市場理論・過少消費説を再確認し、ツガン・バラノフスキーとともにレーニンをも、販路説的偏向の資本主義弁護論として批判している。[10] この点、ローザ・ルクセンブルクが想起される。[11] だがローザがマルクス再生産論を彼女なりに考えぬいたのとは異って、プレハーノフは、はるかに単純で表象的な過少消費説にとどまった。また、「周期的恐慌が全面的な漫性的恐慌に転化しようとしている」という言葉は、いわゆる大不況下にあった世界資本主義の様相を云いあらわしているにしても、ヨリ以上の具体的な展開はおこなわれていない。

プレハーノフの、保護関税論を軸とする市場不足論批判は、市場の経済理論的反省（市場理論）の面においては貧しいが、ロシアの現状展望になると精彩を放ってくる。プレハーノフが保護関税をあのようにもち出したのも、元来はロシアの現状把握のための前置きとしてであった。「最近のわが国の社会的風潮に注意を払ったひとならば誰でも、わが国の〈私的企業家たち〉の努力がまさしく国内市場の確保に向けられていることを、もちろん知っている。この傾向は、政府筋においても、新聞においても……支持をえている。わが教授・学者のうちのすくなからぬ諸氏が、この旗のもとに集っている」[12]――プレハーノフは後進国における産業資本は一定の発展に達すると保護関税を要求するという前述の所論を基礎として、右のような動向こそはロシア資本主義が成長しつつある何よりの証左であるとする。かれによれば、ヴォロンツォフ＝チホミーロフはマンチェスター派の云うところを素朴に信じ、「政府の経済への干渉はつねに害悪であるという説をうけいれ」「ロシアのブルジョワジーが政府の経済への干渉を求めている」のをみて、ロシア資本主義の無力を云うのであるが、これはまったく「知識の不足」にもとづく謬見である。[13] さらに別の個所においてかれは、ロシア・ブルジョワジーは現在、国内市場の確保に主たる力をそそいでいるとはいえ、他方では低労賃を武器としてアジア市場およびバルカン半島市場への進出を試みており、その成功の可能性はいちがいに否定されえないと指摘している。[14]

プレハーノフが、保護主義への動向を、ロシア資本主義の成長のあらわれとして把握したことは、大綱的には正しかったといえよう。じっさい、プレハーノフが『われわれの相違』を書いていた時点は、レイテルン蔵相時代（在職一八六二―七八年）の自由主義的貿易政策からブンゲ蔵相（在職一八八一―八七年）の保護主義へと転換したその初期であった。[15] ブンゲは保護関税のほか、税制改革・鉄道の国有化・工場法の導入などの一連の政策によって、ロ

シア資本主義のヨリ以上の発展のための準備を整えつつあった。[16] 政治的には反動の暗黒期として知られる八〇年代は、経済政策の領域では本格的発展のための基礎が築かれた時期である。しかしロシアの経済そのもの（とくに製造工業）がめざましい発展をしめすのは、一八九〇年以後であり、八〇年代はむしろ緩漫な発展を特徴としていた。[17] そしてこの「緩漫な発展」こそは、ロシア資本主義没落論が抬頭し伝播する地盤であったといえよう。

プレハーノフは、ロシア資本主義が緩漫な歩みをあゆんでいるということ自体はある程度真実である、と考える。しかしかれによれば、チホミーロフ＝ヴォロンツォフのように、そのことから「ロシア資本主義の努力の絶望性」を結論するのはもとより誤りであって、「ロシア産業の緩漫な発展」は「現在の政治的抑圧」のためなのである。絶対主義は資本主義のある段階以上の発展にとってくびきとなる。だが、だからといって資本主義の発展がくいとめられはしない。「あたらしい社会的あるいは哲学的原理はすべて、それとは対立的な旧い原理の胎内において――それゆえその養分を吸収しながら――成長する。[18]」哲学は神学の胎内に育ってやがて神学を否定した。資本主義は絶対主義のもとで成長し、ある段階にいたると、「自由な諸制度を要求し」「絶対主義の利害と相容れなくなり」結局、絶対主義は破砕される。プレハーノフはその古典的ケースとしてフランス大革命をあげ、絶対主義は「全力をあげて新しい条件に適応しよう」としたにもかかわらず、絶対君主はもとよりブルジョワジーも予想しなかった、絶対主義の排除という結果にいたった所以を紹介する。しからばふりかえって現在のロシアの発展段階はどうか。かれはつぎのように述べている。

「ロシア・ブルジョワジーの利害がいまや絶対主義の利害と相容れぬ矛盾におちいりつつあることは、最近十年間のロシア史にほんのすこしでも注意をはらったことのあるひとならば誰でも知っている。しかしながらその同じ

ブルジョワジーが現存体制から利益をひき出すことができること、それゆえブルジョワジーのうちのある部分は、現存体制のある面を支持するだけでなく、現存体制全般に味方すること、このこともなんら不思議でない。……わが国のブルジョワジーはいま、重大なメタモルフォーゼを経過しつつある。すなわち、ブルジョワジーには肺が生じつつあり、かれらはそれによって政治的自治という清らかな空気をすでに求めているのであるが、それと同時にえらが退化しながらも残っており、かれらはそれによって、朽ちゆく絶対主義の腐り水のなかで呼吸しているのである。ブルジョワジーの根は、いまなお旧体制の土壌のなかにあるが、その樹冠は移植の必然性を示すほどまでにすでに伸びている。[19]」プレハーノフは、ブルジョワジーのなかでは、大ブルジョワジーのほうが小ブルジョワジーよりも進歩的であると考える。「クラークはこれまで、わが国家経済の乱脈な性格のおかげを蒙って、ひたすら致富の道を歩みつづけている。しかし大きな工場主、製造業者、商人およびブルジョワ化した農業家たちは、政治的権利を獲得することが自分たち自身の利福のために絶対に必要であることを、すでに理解している[20]」最近十年間に政府に提出せられた請願書において、ブルジョワジーたちは、租税協賛権を要求している。ごく一部のブルジョワだけが、ツァーリズム高官への贈賄によって特権を獲得して法外な利益をうるという、これまでのやり方は、「ひとつの階級としてのブルジョワジー」には次第に堪えがたいものとなってきている。プレハーノフはこのように述べて、現在のロシアを大革命前のフランスになぞらえている。ただし、かれはロシア・ブルジョワ革命が目睫の間に迫っているとは必ずしも考えていないのであって、本稿第二節において述べたように、そこに至るまでにはなおある距離が存在するというのが、かれの考えの本筋である。

以上述べてきたように、プレハーノフは、チホミーロフ＝ヴォロンツォフの西欧対ロシアという空間的な類型的

対置にかえるに、先進的西欧諸国対後進的ロシアという時間的な発展段階的把握を以ってし、ロシア資本主義の現在位置を、リスト的保護関税を要求するほどの程度に産業資本(製造工業)がすでに発展し、かつ、ブルジョワジーが絶対主義を堪えがたく感じはじめているような、その点でフランス大革命前になぞらえうるような段階にあるものとして理解した。かれは、このような大局的・展望的考察のあと、ロシア経済のヨリ具体的な分析に移ってゆく。

(未　完)

(1) Тихомиров, Л,《Что нам ждать от революции?》(《В. Н. В.》N°. 2. 1884. стр. 240.). Плеханов; Изб. фил. произв. т. 1. стр. 205-06.

(2) ただしレーニンにおいては、ナロードニキ市場理論は(1)農民層零落↓国内市場縮小 (2)外国市場欠如の二つの面をもつものとして把握せられているが、本文の引用はその(2)に相当し、(1)は議題にのぼっていない。レーニン「いわゆる市場問題について」(『レーニン全集』第一巻)『ロシアにおける資本主義の発展』(同第三巻)第一章参照。

(3) つぎの紹介は、第一章六節とくに Там же. стр. 207-16. である。

(4) フランスについては Levasseur; Histoire des classes ouvrières en France. Farman, H. W; Die innere französische Gewerbepolitik von Colbert bis Turgot. Perigot, C.; Histoire cu commerce français. ドイツについては Meyer, M.; Die neuere Nationalökonomie. アメリカについてはリストのほか Eisenhart; Geschichte der Nationalökonomie, Bd. III. が使用されている。

(5) 同七節とから構成したものである。

(6) Плеханов; Там же. стр. 250. 以下の本文に述べるプレハーノフの市場理論はテキストの第二章一節のはじめの部分と、

(7) 「すべての後進国は、最初のうち国内市場が溢れるまでは、ヨリ発展した隣国からのあまりにも強力な競争を、保護制度によって遠ざけることができる。」(Там же. стр. 220)

(8) Там же. стр. 250.

(9) レーニンの、市場理論についての『資本論』の読みとり方と理論構成については、拙稿「レーニンの市場理論について」

（『経済論叢』七四巻五号）を参照。

(10) 「ツガン・バラノフスキー氏が主唱者であるこの理論にしたがうと、過剰生産は不可能であって恐慌は生産諸手段の配分におけるたんなる不均衡によって説明せられる。この理論はブルジョワジーをたいへん喜ばした……。しかし実はすこしも新しくはないこの学説の真の父はJ・B・セーであった。……ツガン・バラノフスキー氏のほかに、レーニンも『市場理論の問題への覚え書』と『ロシアにおける資本主義の発展』のなかでJ・B・セーの理論を表明した。」（Там же. стр. 252）プレハーノフのツガン批判の意は了解せられるが、プレハーノフ自身の素朴な過少消費説のほうがヨリすぐれているとはいえない。マルクスの恐慌論が多義的な解釈を生ぜしめ、現在においても未解決な問題をもっていることは事実である。しかしツガンとプレハーノフのいずれも、マルクス理論でないことだけはたしかである。ブローヴェルがプレハーノフはついにマルクスの再生産論を理解しなかったといっているのは正しい。См. Бровер. И. М.; Экономические взгляды Г. В. Плеханова, 1960. стр. 107–8, 120.

(11) ローザ・ルクセンブルグ『資本蓄積論』中巻（岩波文庫）二三章を参照。ローザもまた、再生産論に関してレーニンをツガンとともに批判している。

(12) Плеханов, там же. стр. 220. 以下の紹介はテキスト第二章一節。

(13) Там же. стр. 223–4.

(14) Там же. стр. 250.

(15) ドイツにおけるロシア研究の権威でもあったシュルツェ＝ゲーファニッツは、一九世紀中のロシアの関税政策史を、(1)一八〇〇―二三……輸入禁止的　(2)一八二四―五〇……禁止的高関税から高度保護関税への移行　(3)一八五〇―一八七六……自由貿易化　(4)一八七七―……高度保護関税への逆動　の四つの時期に区分している。ただし、一八七七年の、関税金貨支払令による実質的な関税率ひきあげは、主として財政的理由によるものであったが、一八八一、八五、八七年の関税改訂は「モスクワ工業とその同盟者」のインテレッセを実体的基礎としており、やがて一八九一年のかの高度保護関税に至るのである。化学者メンデレーエフを主唱者とする保護主義運動は「祖国の経済的独立」のスローガンによって、スラヴ主義者たちをも糾合した。「一八八一―八五年の間に、鉄と石炭の土俵上で、保護関税論者の決定的勝利があった。」シュルツェはこの動向を「新

重商主義」と名付け、モスクワ資本が一方では地主を、他方ではペテルブルクを中心とする北西部の資本（これは西方との自由貿易を望んでいた）をおさえて制覇してゆくことが過程の内容をなしていたと述べている。 Schulze-Gävernitz, G. V.; Volkswirtschaftliche Studien aus Rußland, 1899. SS. 243-307.

(16) 「ロシアにおけるブルジョワ経済政策のもっともすぐれた指導者」（リャシチェンコ）といわれるブンゲは、農民の買戻し支払金負担の軽減（一八八二）、人頭税の廃止（一八八三）などの、農奴制遺制の除去をめざす改革、農民銀行・貴族銀行の設立、関税改革、鉄道国有化政策のほか、工場法の導入においてはモスクワ・ブルジョワーの反対をおし切って、本格的な資本主義化のための布石をおこなった。Лященко, П. И.; История народного хозяйства СССР. т. II. 1952. стр. 174-81. 八〇年代の経済政策の意義については和田春樹「近代ロシア社会の構造」（歴研別冊『世界史と近代日本』一九六一年十月）の注目すべき清新な見解を参照。

(17) ロシアの経済は、一八七〇年代初頭の昂揚期ののち、「一八七三—七七年には長期の沈滞期」に入り、露土戦争による七九—八一年のブームののち八一—八二年にはパニック、以後九〇年代初頭にいたるまで「長期的不況」がつづく。七〇年代中葉—八〇年代おわりまでの時期は、不作の頻発のほかに、新規鉄道建設距離、株式資本形成においても、発展の速度はスローダウンしている。 См. Лященко. там же. стр. 123. 信頼すべき統計資料の欠如のために、八五年以前についての総括的数字はえられないが、工業の年平均成長率を一八八五—八九年＝六・一〇%、九〇—九九年＝八・〇三%とする推定もある。 Gerschenkron, A.; The Rate of Industrial Growth in Russia since 1885, Journal of Economic History, Sup. VII. 1947. p. 1947. ほかに、Portal, R.; La Russie industrielle de 1880 à 1914, 1960. p. 9.

(18) Плеханов, там же. стр. 223.

(19) (20) Там же. стр. 224.

〔追記〕 本稿は昭和三五年度文部省科学研究費（機関研究）による研究成果の一部である。